

# 「拒絶の中に光る希望」

～希望の錨～ヨハネ 1：9-13、ヘブル 6：17-20（ローマ 15：1-4、5-1.6）

錨とは何か、それは望みであるとヘブルには書かれています。ヨハネの1章は暗闇の中で灯った光について伝えています。私たちは、よいことがあるとその後闇が来るという恐れを持っています。何故でしょうか、それはそこに裏切りがあるからです。しかし、神様が最初に天地を創造した時、「光よ、あれ」から始まったことから、暗闇があって光があったことが分かります。「夕があり、朝があった」と聖書はいつもこの大原則を伝えています。闇は光を飲み込むことは出来ません。光は闇に負けることは決してないのです。

ヨハネ 10、11 節はイエスキリストの誕生を、罪を大きなテーマとして伝えています。人は愛し合う存在だったにも関わらず、罪は「拒絶」を与えました。受け入れるはずのものを拒否したのです。比較も、裏切りもすべてはこの拒絶から始まっていきます。罪の根源は相手を拒否するところから始まるのです。生まれる時でさえ宿屋にも泊まれなかったイエスキリストの最初の痛みも拒否だったのです。裏切られたことのない人、裏切ったことのない人はいないはず。この裏切られることと裏切ることは同じです。人の最大の罪であり防衛なのです。人を裏切るとは信じないということです。逆に信じる心とは何か、それは自分の罪を受け入れようとする心です。イエスキリストは重い十字架を背負って行かれました。それは私たちが罪の大きさを知り、赦される大きさを知ることでした。赦された人は初めて人を赦すことが出来、赦すことが出来て初めて人を信じる事が出来るのです。信じる行為がその人を作り変えていきます。これがイエスキリストが十字架で行った奇跡なのです。人は信じて貰うことで唯一変わる事が出来ます。ですからクリスチャンの仕事は信じることであり、被害者の人生ではなく加害者の人生を歩むことです。この世の中で戦争が起こったり、問題が解決出来ないのは自分を被害者だと思っているからです。私たちの心が間違っている、人生の中心に喜びと悲しみがあれば戻ることが出来ます。しかし、怒りしかないと絶えず被害者であり憎しみで終わってしまうのです。怒りは憎しみを生み出し、憎しみは相手を殺してしまうまでに至るのです。

## ■ ①闇を知る 認める

もし人生が今暗闇の中にあるのなら、神様がそこに太陽を昇らされることを覚えておいてください。暗闇のままでは終わりません、それが聖書の原則だからです。ですから暗闇になった時が大切なのです。暗闇になった時に希望をもたらすのが錨です。大嵐が来た時に船から鉄の大きな錨を投げ入れ、そして岩に食い込みます。地球にアンカーをかけているのです。聖書はイエスキリストを信じる信仰があなたを救いに導く、その希望が信仰の導きだと言っています。ですから信じるということはその希望が伴わなければならない。

## ■ ②拒絶から自由に

## ■ ③鎖から自由に 嵐には錨

錨はどんな時に使うのでしょうか。それは私たちの人生に問題がある時です。拒絶は罪の根源です。私たちはいつもそれを忘れて人生を生きってしまうの

で、拒絶されるたびにクリスチャンでありながら傷つくのです。しかし傷つく必要はありません。人が最初にその道を選んで以来、この世の中で拒絶は絶えず起こるからです。人のアイデンティティは継承されていき、親がやったように子は振舞い、それが正しいと思うようになります。しかし聖書に照らし合わせると間違っていることが分ります。今あなたの人生でどんな鎖がぶらさがっているでしょうか。この鎖とは過去です。イエスキリストは私たちのこの過去を帳消しにし、鎖から自由にするために十字架にかかったのです。それにも関わらず私たちは誰かを憎しみ裁き、被害者になって誰かを指差し生きています。それを止めなければなりません。暗闇に光を灯すためにイエスキリストはこの地に来られました。クリスマスとは十字架です。この十字架によって鎖から自由になったら、誰かにその火を灯していくことが大切です。この十字架を思いながらあなたの鎖を降ろしてください。そして十字架は希望です。あなたの人生を光に変えるために命をかけたのです。希望とはどんなことがあっても信じ、そこに将来があることを望む姿です。この希望の錨を結ぶことが大切です。厳しい状況にあればある程信じ、そして私を通して栄光に変えてくださいと願うことが出来るのがクリスチャンの役割です。あなたの親の価値観を捨て、過去の縄目や被害者意識を捨て、赦せない人を愛する決心をし、どんな嵐にも揺り動かされない錨を置いて、あなたの船に乗る人を守らなければならない。感情的になるのではなく、嵐の時こそ静まるのです。イエスキリストは十字架にかかる時でさえ一度も感情的になりませんでした。何故出来たか、それは神様に錨を結んでいたからです。そして将来与えられる恵みを信じていたので右往左往しなかったのです。私たちの心には既に光があります、しかし光を覆っている意味がありません。過去の鎖が恵みを無にしているなら捨てましょう。イエスキリストにそんな生まれ方をさせたことを悲しみ、そんな彼を無視し拒絶したことを悔い改めなければいけません。そして自分の人生がどれだけ人を拒絶しているのか、それをもう一度思い返さなければなりません。イエスキリストは拒絶される人生を一人で受け入れました。彼はどんな状況でもあなたを愛し、あなたの拒絶を理解し分かると言ってくれたのです。

## まとめ

『十字架のことばは、滅びに至る人々には、愚かであっても、救いを受ける私たちには、神の力です。』（1コリント 1：18）信じる私たちは神の力を持っています。世の中の大半が信じようとはしません。そんな中で唯一クリスチャンが出来ることは、人のした悪を憎まず、その人を赦し、その人が作り変えられることを信じることです。神様は一度でもあなたに指を指し、変わらないことを責めたりしたでしょうか。叱責や厳しさはありますが、それは愛に満ちています。良くなることを信じ、あなたのために命をかけた人です。心に微塵も裁く心など持っていません。そんな方があなたを愛し赦しています。過去を捨て、裏切りの連鎖をここで止めましょう。このクリスマスの日、イエスキリストを本当に愛する姿になっていきましょう。

（要約者：西寄 芳栄）

（2018年12月23日）